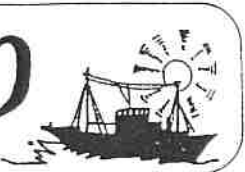


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行
助 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

昨年十一月末、都立第五福竜丸展示館で「ベン・シャーン展」を見ました。鉄骨の展示館の中に足を踏み入れると、建造物いっぱいにある福竜丸がそそり立ち、見る者を圧倒します。訪れるたびごと、その姿に心が揺さぶられます。―船体への投影―という副題のついたこの展示では、船と、その周りに寄り添うように配置されたシャーンの素描と、当時を物語る資料の三者とが絶妙なハーモニーを醸しだしていました。この事件の意味するものを、シャーンは見事に描ききっています。この絵を静岡の人々にも見てもらえたらなあ、と、夢見たことが、展示館のご好意で現実のものとなりました。こうして、二月二十八日から五月十八日までのほぼ三ヶ月間、人類史に大きな位置を占めてきた郷土の歴史・「第五福竜丸とベン・シャーン展」を静岡市・焼津市の後援を得、静岡平和資料センターオーブンニング展示Ⅱとして開催することができました。意外なことですが、静岡市では初めての展示でした。当センターは、「静岡平和資料館をつくる会」が市の補助を受け、昨十

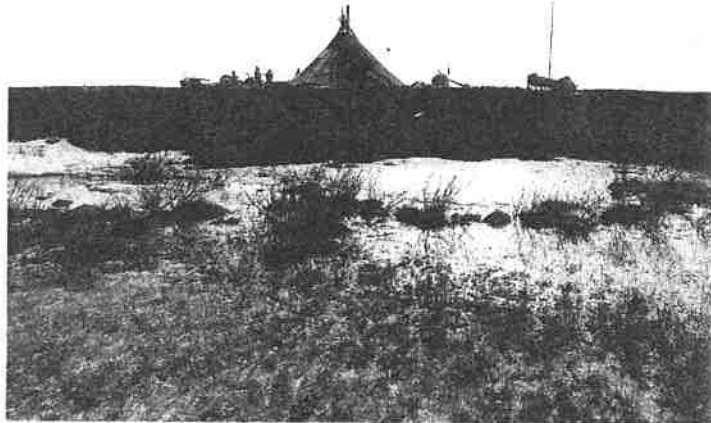
静岡での第五福竜丸展

新妻 博子

月に移転・オーブン。すべてボランティアで運営されています。会の前身は二六年前に発足した「静岡市空襲を記録する会」。これまで空襲関連の出版物を出したり、資料の収集・展示などを行ってきました。空襲に関する展示と違って、福竜丸に関してはこれまでに出版された印刷物に多く頼らざるを得ませんが、当時の事情を知る元新聞記者、科学者などからお話を伺った他、元漁労長見崎吉男さんを囲んで直接事件当時のお話をお聞きする会をもつことができました。細かい事実経過は勿論のこと、なによりも事件の背景となる時代の雰囲気、遠洋をめざし上昇しようとしていたマグロ漁業、そこに働く漁師の条件や日常などを知ることができ、歴史認識を多少なりとも深めることができたのは大きな収穫でした。展示をしてみても驚いたことは、来館した小学生の殆どが第五福竜丸の名さえ知らないということ。折から動燃の事故、彼らの興味を引いたのがガイガーカウンターで実際に放射能を測定してみることでした。また、全国から生協の方々が大量来館、その中に原水爆禁止運動の先駆けとなった杉並の

方がいらして、展示してある署名簿は自分たちが集めたものであると話してくれました。シャーンの絵が目的で来館する人も多く、「静岡で彼の原画に出会えるなんて……実は今鳥肌が立っているんです。」と嬉しいことを言ってくれた青年もいました。皆さん異口同音に「静岡にこそ彼の絵が欲しい。」そして何よりも目立ったことは、焼津から訪ねて来て下さる方が多いことです。元漁師の方や漁業関係者からは当時のことや漁業のことを教えて頂き、展示に新たな情報を加えることができました。不十分な展示ながら見崎吉男さんにも見ていただき、二・三の指摘をもとに、早速展示を手直しすることができました。また元乗組員のご遺児をはじめとする多くの方々、第五福竜丸展示館や焼津市歴史(民俗資料)館などお世話になった施設の方々との出会いがあり、これらのひとつひとつが私たちの貴重な財産となっていくでしょう。

展示をする側と見る側が限りなく近い関係にあり、情報の交換を展示に生かすことができるのも僅か九〇平方メートルの手作りの資料館だからこそ。逆境をバネにしてこれからも「人類の英知は、まず事実を知ることから始まる」ことを信じて進みたいと思っっています。(静岡平和資料館をつくる会)



ツンドラでトナカイの放牧で暮らすネネツの家族のテント・チュム (<3面参照> 撮影・豊崎博光)

“死の灰―風下―地球被曝” ―豊崎博光写真展ひらく―
五月二十日から第五福竜丸展示館で、豊崎博光写真展「ATOM I C AGE 地球被曝―はじまりの半世紀」がひらかれました(六月二十二日まで)。この半世紀、核開発が作り出した大量の放射能―死の灰、それは「地球被曝」そのものであり、膨大なヒバクシャを生み、生み出し続けている。豊崎さんがマーシャル諸島を皮切りに二十年来にわたり撮り続けてきた世界各地の核実験場、風下地域、ウラン採掘場、原発の写真からモノクロ写真を中心に一〇三点を展示した写真展で、第五福竜丸の外板に接するようにぐるりと並べられ、船と一体となつて静かに語りかけ、深い印象を与えています。つぎつぎに訪れる修学旅行の中学生にまじつて、一点一点につけられた長く重みある説明を丹念に読む青年、若いカップル、愛用のカメラを抱え、写真集・著書が置かれたコーナーで話し合う人々の姿も多く、反響が広がっています。

中学校の来館 一一五 校に

写真展開催の時期は、展示館を訪れる人びとの最も多彩でにぎやかな時。五月中に訪れたのは三万人近く一七一



船を囲むように展示された“地球被曝”の写真展

団体でしたが、そのうち修学旅行による中学校の見学は一一五校に及びました。三重県、和歌山県、岩手県の学校が多く、三重県の阿山中学校は、船体内で乗組員大石又七さんの話を目を潤ませ、富洲原中学校は船を前に整列、四部合唱「大地讃頌」をいっばいに響かせました。岩手県の城東中学校は、昨年訪れた先輩の写った展示館のポスターに「私たちも来た！」と歓声を上げました。

久保山記念碑に郷里の小石

毎年訪れる和歌山県海南市の海南第二中学校は、今年も第五福竜丸のエンジンを引き揚げた同市の杉末広さんの願いを受けて、エンジンの沈んでいた御浜町の海岸の小石を一人一人袋に入れて来館。久保山愛吉さんの記念碑前にていねいにならべて、亡くなった乗組員を追悼し、原水爆のない未来へ力をあわせたいと誓いました。

エンジンを夢の島へ、
保存の募金も

五月二十日、江東区職員労働組合の若島幸作さんをはじめ青年部の代表が来館、はがきを作り、エンジンを夢の島へなど訴え集めた二十万円を「第五福竜丸保存のために」と贈りました。来館の学校、都民からも募金が寄せられています。



久保山愛吉記念碑前に小石をならべる

一九七八年にマーシャル諸島から始めた世界のヒバクシャを訪ねる旅は、今年で二十年になる。最初のマーシャル諸島の島々への旅は船だった。太平洋戦争末期に造られた米軍の機雷掃海艇を改造した小型船で、海が荒れるとひどく揺れ、食事は中腰でテーブルにはいつくばってとった。船足は人の歩みほど。約二週間かかって死の灰をあげられたロンゲラップ島や核実験場とされたビキニ、エニウェトク環礁に着いたが、どの島でも船は最長二日間しか滞在せず、走り回って取材をした。この時の船旅は予定の三週間ははるかに上回る四〇日間となり、船に水と食料がなくなると、生まれてはじめて飢えを体験した。

いま島々へは航空路が開かれている。しかし、ロンケラップ島住民が暮らすメジャト島へは船で行くしかない。クワジュレン環礁イバイ島から約二〇キロ。陸路を車でいけば約一時間の距離だが、船では半日かかる。海路の二二〇キロは苛烈である。海路の二二〇一九八〇年、アメリカのネバダ

では、北極海にあるノバヤゼムリヤ島で行われた核爆発実験の死の灰によってトナカイの餌のコケが汚染され、そのトナカイを主食とするネネツなどの人々の間に腎臓ガンなどが見られている。チャーターしたヘリコプターから見たツンドラは、春とはいえまだ凍りついた広大な大地で、そのなかに人間を見つけたことは至難だった。ネネツの一家はチュムとよぶ円錐形の移動式テントで暮らしていた。チュムはキャンバス布とトナカイの毛皮を張り付けた簡単なものだった。「冬は零下四五度にもなる。チュムは三〇分以内に建てないと、女性と子供は凍え死んでしまうから大変なんだ」。長兄はいった。零下四五度での暮らしは想像を絶し、体が震えた。チュムノブイリ原発事故から十年目をむかえた昨年九六年は、スウェーデン中西部でトナカイの放牧で暮らす先住民サミの人々を訪ねた。スウェーデンはチュムノブイリ原発事故の死の灰で全土が汚染された。

見たのは二度だった。繁殖の季節といわれたが、子連れのトナカイは餌のコケを通してしまなお汚染されていて、体内のセシウム量は事故直後と変わらない。食物連鎖をへて、死の灰の濃縮が進んでいるのである。これまで訪ねた世界各地のヒバクシャの多くは都市から遠く離れた地域に住み、暮らしは元々厳しい。それに被曝による健康への影響、精神的な影響が加わり、文化や伝統、コミュニティの崩壊を招いている。しかし、「全面的核実験禁止条約」成立以降盛り上がる核廃絶運動のなかでヒバクシャの問題は忘れがちである。この半世紀間の核開発で作られた大量の放射能は、もう大数のヒバクシャを生みだし、いまなおヒバクシャを生みだしつづけている。

六月二日まで、第五福竜丸展示館で開催していただいている写真展「地球被曝―はじまりの半世紀」は、これまで生みだされた世界のヒバクシャのほんの一部であり、私が訪ねるに取材させていただいたヒバクシャのうちの一部です。(フォト・ジャーナリスト)

世界のヒバクシャを訪ねる旅

豊崎 博光

「第五福竜丸」

奈良県立ろう学校中学部三年生 富山 篤史

新木場駅から降りて、約十五分歩いたところに、鉄筋二階建ての建造物がある。中に入ってみると、船が目の前にパッと入った。その船に第五福竜丸と書かれていた。ああ、これが僕が見たかった第五福竜丸なんだなあと思いました。その時、外では雨がやみ、太陽が顔を出そうとしていました。あつ、僕が第五福竜丸に会えたから晴れたのかなと感じた。だが、まだいいことが続いていた。僕が久保山さんの展示を見ていた時の事だった。樽井先生が僕の肩をたたき、「ここに、大石又七さんが来ているんだって。」とメガネザルのような目で言いました。

「エーッ、ほんま?」と初めは信じられなかった。本当の事だとわかったら、心が花火のように爆発するほどうれしかった。第五福竜丸展示館の館長さんに案内されて、船の中に入れてもらいました。僕は樽井先生から、「死の灰を背負って」という本を借りていて、大石さんの顔を知っていました。だから大石さんの顔を見ると、「あつ、この人だ。」とすぐにわかりました。他の中学生も来ていて、いっしょに大石さんの話を聞きました。僕はものすごくうれしかったので、大石さんの話している顔をじっと見つめていた。この建物の中で僕は「大石さんの話を聞いている。ああ、なんという幸せ。神様、ありがた。そのような気分です。手話通訳をしてくれている綿井先生の話も聞きました。大石さんは、漁師にあこがれていた少年時代や、被爆の事や、焼津の人達にお金の問題で冷たい目で見られる事が怖かったということなどいろいろ話してくれました。大石さんの目を見ると、核兵器をなくせという想いが僕に伝わってきました。ああ、一九五四年から今までの間、どんなにつらかっただろう。親友が次々と亡くなって行き、次は僕が死ぬのかという闇のような不安に襲われて悲しかっただろう。僕の心ではみぞれのような涙があふれていた。もし、僕

が被爆者だったら、「この憎っくきアメリカめ! 許さないぞ!」と鬼のように怒っていたにちがいない。そう思ってきたと、大石さんの事がとても気の毒でたまらなかつた。だが、大石さんは泣いてばかりはいられない、堂々と生きていこうというたくましい心を持っていたので、僕は感動しました。大石さんの話の内容は、本の内容と似ていたけど、実際に会って話を聞くほうがわかりやすく思えた。最後に、みんなで大石さんといっしょに写真を撮りました。そして、他の中学生が帰ると、僕は「大石さんに質問した。」「将来、核兵器はなくなると思いませんか?」と尋ねてきた。僕は胸を張って、「なくなると思っています。」と言いました。そして、大石さんは笑顔で浮かべて

「すばらしい、君が頑張ればなくなるかもしれないね。頑張ってください。」と握手をしてくれた。大石さんからはめるように握手をしてくれてたんだから、本当にとんでもうれしかったです。今でも、その温もりが僕の手に残っています。もう帰る時間が来た。予定より一時間三十分遅れていた。でも、僕は時間の事はどうでもいいと思っていた。だって、偶然とても優しい大石さんに出会えたから。大石さんにあいさつをして、ちよつと展示を見に行つた。そして、玄関を出ようとした時に、感想文コーナーがあった。僕は、核兵器をなくせという怒りと、世界を平和にしようという想いを心にこめて書いた。僕は大石さんに会えて本当にうれしかった。一九五四年、ビキニ環礁で起こった水爆実験が二度と起こらないよう、そして世界の人々が協力して核兵器反対運動を起こし、平和な世の中になるよう祈ります。」と。沈む夕日と第五福竜丸を背に、第五福竜丸のこゝろ大石さんと握手した事は一生忘れないと誓った。